

ハイデルベルク信仰問答講解説教 3 2 「感謝に生きる」(2012年4月8日 礼拝説教)

【聖書箇所】

あなたの神、主が嗣業の土地として得させるために与えられる土地にあなたが入り、そこに住むときには、あなたの神、主が与えられる土地から取れるあらゆる地の実りの初物を取って籠に入れ、あなたの神、主がその名を置くために選ばれる場所に行きなさい。あなたは、そのとき任に就いている祭司のもとに行き、「今日、わたしはあなたの神、主の御前に報告いたします。わたしは、主がわたしたちに与えると先祖たちに誓われた土地に入りました」と言いなさい。祭司はあなたの手から籠を受け取って、あなたの神、主の祭壇の前に供える。(申命記 26 : 1-4)

こういうわけで、兄弟たち、神の憐れみによってあなたがたに勧めます。自分の体を神に喜ばれる聖なる生けるいけにえとして献げなさい。これこそ、あなたがたのなすべき礼拝です。あなたがたはこの世に倣ってはなりません。むしろ、心を新たにして自分を変えていただき、何が神の御心であるか、何が善いことで、神に喜ばれ、また完全なものであるかをわきまえるようになりなさい。

(ローマ 12 : 1-2)

【説教】

今日からハイデルベルク信仰問答は第三部という区分に入ります。信仰問答は、三部構成として、第一部に人間の罪、第二部にキリストによる救い、そして第三部が感謝についてであります。すでにわたしたちは第一部、第二部と読んできて、今日から信仰問答の最後の部分に入るわけです。最後は感謝で締めくくられます。

この第三部には、感謝という表題がつくのですが、わたしたちの生活を一言で言えば「感謝」であると信仰問答は語ります。でも振り返ってどうでしょうか。わたしたちは感謝の生活をしていると言えるでしょうか。そこはなかなか答えに窮するところでもあります。

先日、娘の中学校の入学式に出席しました。校長先生の祝辞があって、その中で「ありがとうの心」「感謝の心」を持ちましょうという勧めがありました。こういう教えは繰り返し聞くことですが、しかしやはり言われないうと気付かないのです。特に震災以後、毎日の生活、当たり前前の生活に感謝するということがよく言われます。確かに、毎日ご飯が食べられること、安心で安全な生活ができることは幸せなことなのです。放射能のことを心配しないで何でも食べたり外で遊んだりできることは本当に感謝なことだと思えます。でもわたしたちはそういう当たり前前の生活に慣れてしまっ、感謝の気持ちも忘れる。もっとより良いものを求めるようになる。あるいは人と比較して自分が足りないように感じる。いかにわたしたちは感謝から離れやすいかということです。

1テサロニケ 5 : 16 以下に「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。」とあります。どんなことにも感謝する。これは不思議な言葉です。良い時は感謝できるでしょう。でもわたしたちの生活ではどんなに逆立ちしても感謝できないことがあるのです。それでも感謝しなさい。それは無理をして感謝することでしょうか。そうではないのです。感謝の源が違う。わたしたちが一般的に考える感謝は、絶えず人間の物差しの中で計られるものです。人間が良いと感じる時は感謝であり、不快に思えばそれは途端に感謝ではなくなるのです。人間の心の動き次第で左右されるのです。だから感謝が安定していない。

聖書が「どんなことにも感謝しなさい」という場合の感謝、あるいは信仰問答がわたしたちの生活を感謝とする場合の感謝は、それとは根本的に違うと言わなければなりません。わたしたちの側の心の動きで左右されるものではない。それは神さまが与えるもの。あるいは神さまに根拠を置くものなのです。ですからそれは日毎に変わるものではない。忘れり、思い出したりを繰り返すものでもない。わたしたちの全生活がその感謝で常に満たされるものになる。それは自分が意識する、しない

に関わらず、時に忘れていくかもしれません。でもその生き方そのものがすでに感謝になっている。神さまを讃える生活になっている、そういうものであります。

そのような感謝の生活を信仰問答はここで教えます。実は信仰者とは、すでにこの感謝の生活を始めている存在であることを自覚しなければなりません。先週はイースターの礼拝をまもりました。そこでキリストの復活は、わたしたちの復活のこともであると語りました。洗礼を受けてキリストと結ばれることは、わたしたちもこのキリストのよみがえりの命を生きるということです。しかもそれは「身体のよみがえり」であり、わたしたちは罪に死に、キリストのよみがえりの新しい身体をもって今もう生き始めているのです。つまりわたしたちの具体的な日々の生活は、キリストのよみがえりの命を体現するものとなっています。

そのことを今日の信仰問答も言い表しています。問 86 の答「その聖霊によってわたしたちを御自身のかたちへと生まれ変わらせてもくださるからです」「御自身のかたち」これはキリストのかたち、神のかたちのことです。人間が墮罪以前に持っていた祝福された状態です。これは先週読みました I コリント 15 : 49 に「わたしたちは、土からできたその人の似姿となっているように、天に属するその人の似姿にもなるのです」ここも関係しています。「天に属するその人の似姿」これもキリストのことであり、わたしたちはキリストと似たものとされる。これはよみがえりのキリストのかたちになるということです。それはキリストに結ばれることによって、そのようにされるのです。注意していただきたいのは「かたち」ですから具体性もっています。それは手に取って分かるような具体的な実りなのです。それをすでにこの信仰問答では問 64 で「キリストに接ぎ木された人々が感謝の実を結ばないことなど、ありえないからです」と告白しています。「感謝の実」それがこのところと言うキリストのかたちとして生きることであります。

ですから救いは、決して空想の世界のことではありません。現実逃避でもないのです。わたしたちの生き方、生活に直接関わることとなります。だから大事なのです。信仰を何かのついでのように考えてはいけません。趣味や娯楽の一つではないのです。わたしたちの生き方と直接関係してくる。明日からの生活、いや今日から、この礼拝からわたしたちは新しくなることができる。何歳になっても、すべての人間がこの信仰で変わるのです。しかもそれは「あなたが自分で生き方を変えなさい」というような自己啓発的なものではありません。「聖霊によって」すなわち神さまがわたしたちを根本的に造り変えてくださる出来事なのです。

わたしたちは変わらなければなりません。それは自分がそう

感じているからではなく、神さまがそれを求めておられるのです。問87を読みましょう。わたしたちはここに悪徳表のような生き方をしてきました。そこに罪の人間の姿があります。でもそれが変わるのです。それは自分で努力してよりよい人間になるというたぐいのものではありません。悔い改めというのは、改善することではなく、全く新しくなることなのです。キリストのかたちに生まれ変わる。そこには自分でありつつも新しい自分がある。よみがえりの命を生き始める新しい自分があるのです。

しかしまだここにある生活に留まるということならば、その人は本当の意味でまだ救われていない。罪の支配にあるということになります。問86に「わたしたちが自分の信仰をその実によって自ら確かめ」とあります。自分がそのかたち、感謝の実を持っているか。そこで信仰を確かめることができる。その生活を見ればその人が救われているかが分かるのです。けれども、その生活も自分でいやいやする、仕方なく改善することもあってでしょう。表面的には体裁は整えるけれども、心から喜んでいないならばどうでしょう。それは感謝の実と言えるか。これは経験上、言えるのですが、人から何かしてと言われると、わたしなどは逆にしたくなくなるものです。外側から強いられることは、喜んですることができない。喜んで何かをするのは、その行為が自分の内側から起こる時です。それは何かを意識してするのではなく、無意識の内にも進んでそのようにするのです。わたしたちはそのように内側から感謝の実を結ぶように新しくされるのです。それが感謝の生活であり、ここで言う「善い行い」のことです。

ここで改めて問86に注目しましょう。問いの部分を読みます。この問いは一つの疑問を含んでいます。それは人間が罪の状態からキリストによって無条件に救われているならば、もう善い行いは必要ないのではないかとということです。どうもこの人はどんな人でも救われるならばはや善い行いは必要ないと考えているようです。確かに救いは恵みですから、わたしたちの善い行いは神さまの救いに関係しません。それでもどうして善い行いをしなければいけないのか。

この人は、まだ善い行いが内側から起こることに気付いていない。でもそれが自分の中から沸き起こるものとなる。わたしたちはキリストのかたちに生まれ変わらされているのです。答「なぜなら・・・」キリストの十字架のあがない、そして復活の命に聖霊によって導かれる時に、そこで善い行いは自分の外ではなく内側になるのです。そういう命をわたしたちが内側に持つからです。わたしたちの内にキリストが入るのです。だから強いてするのでも、形だけ、体裁だけ整えるのでもない。心から善い行いに生きることができる。いや生きなければ逆に嘘なのです。そうするしかない。

この問答を読みながらルカによる福音書のザアカイの物語を思い起こしました。ルカ19:1～を読みましょう。ここに今日の善い行いがどういうものであるかがよく表されています。ザアカイを主は認められて「今日はぜひあなたの家に泊まりたい」と言われます。6節「ザアカイは急いで降りて来て、喜んでイエスを迎えた」その時に彼は変わりました。主イエスを迎えた瞬間に彼は生まれ変わった。新しくなった。そして善い行いに生きる者とされます。仕方なくではない、喜んでそうなのです。わたしたちも同じです。

さて、この問答では、善い行いに生きる二つの目的が示されます。一つは「それは、わたしたちがその恵みに対して全生活にわたって神に感謝を表し、この方がわたしたちによって讃美されるためです」神さまに感謝し、神さまを讃美するため。それは日曜日の礼拝だけではありません。全生活がそうなる。全生活が礼拝になる。ローマの信徒への手紙12:1「自分の体」この体を用いて生活するすべてを神さまにささげる。神さまに喜ばれるものとしてささげる。そういう生き方ができる。人間は神さまに造られたものですから、本来はそうであるはずなのです。でも罪を犯してそのかたちから外れてしまいました。キ

リストはそのわたしたちをもう一度新しく造り変えて、その全存在をもって神さまを讃える者としてくださる。黙示録に四六時中の礼拝というのがあります。「昼も夜も絶え間なく言い続けた。聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな」それは終末の完成を表していますが、わたしたちはもうその時を先取りしている。わたしたちの思い、言葉、行い、そのすべてが神さまの栄光のために用いられる。

もう一つは、「さらに・・・」善い行いは「隣人をキリストに導く」伝道となります。「敬虔な歩みによって」それはその人の生き方そのものがキリストを伝えるということです。これはわたしたちがキリストの命を生きるならば当然のことですが、これは意識してそうするのではなく、このわたしからキリストの命がにじみ出てくる。キリストの香りと言ってもよいでしょう。それを放つようになるのです。伝道がしばしば言葉による説得、外側から押しつけるようなものになってしまうことがあります。伝道は訪問販売のようにできるものではありません。その生き方に触れ、言葉に触れ、思いに触れる中で、キリストが伝わるのです。

今、教会の百年史を編纂しておりますが、明治期にプロテスタントの宣教師が日本に伝道したことを考えます。彼らの伝道は理屈ではないのがよく分かります。言葉の壁もあつたでしょうから、今のように厳密に教理を教えていたわけでもない。それでも多くの人たちが信仰を与えられて洗礼を受ける。それはキリストへの愛、熱心ではないでしょうか。そういう生き方が人々の心にキリストを映し出したのです。わたしたちもそのように召されております。祈りましょう。